

「群馬の万葉歌をよむ」

群馬県立女子大学 北川 和 秀

平成二十五年三月五日
高崎市吉井公民館講堂

◎万葉集卷二十・防人歌

①天平勝宝七歳乙未二月、相替りて筑紫に遣はさるる諸国の防人等の歌

遠江国	7首／18首
相模国	3首／8首
駿河国	10首／20首
上総国	13首／19首
常陸国	10首／17首
下野国	11首／18首
下総国	11首／22首
信濃国	3首／12首
上野国	4首／12首
武蔵国	12首／20首
84首／166首	

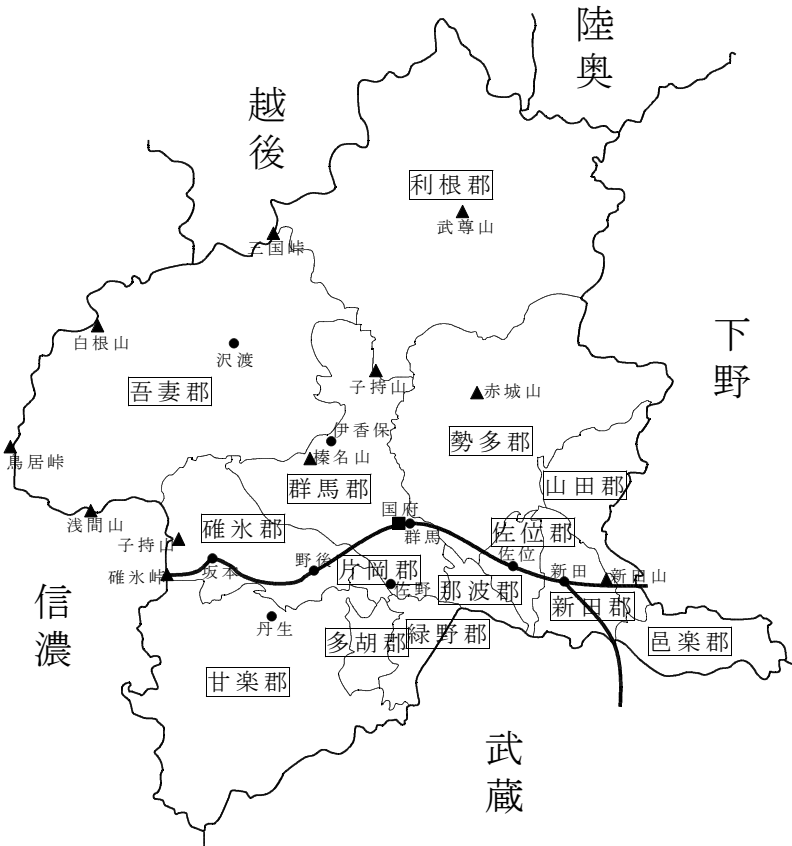
②昔年防人 … 8首
合計 92首

◎万葉集卷十四（東歌）の配列

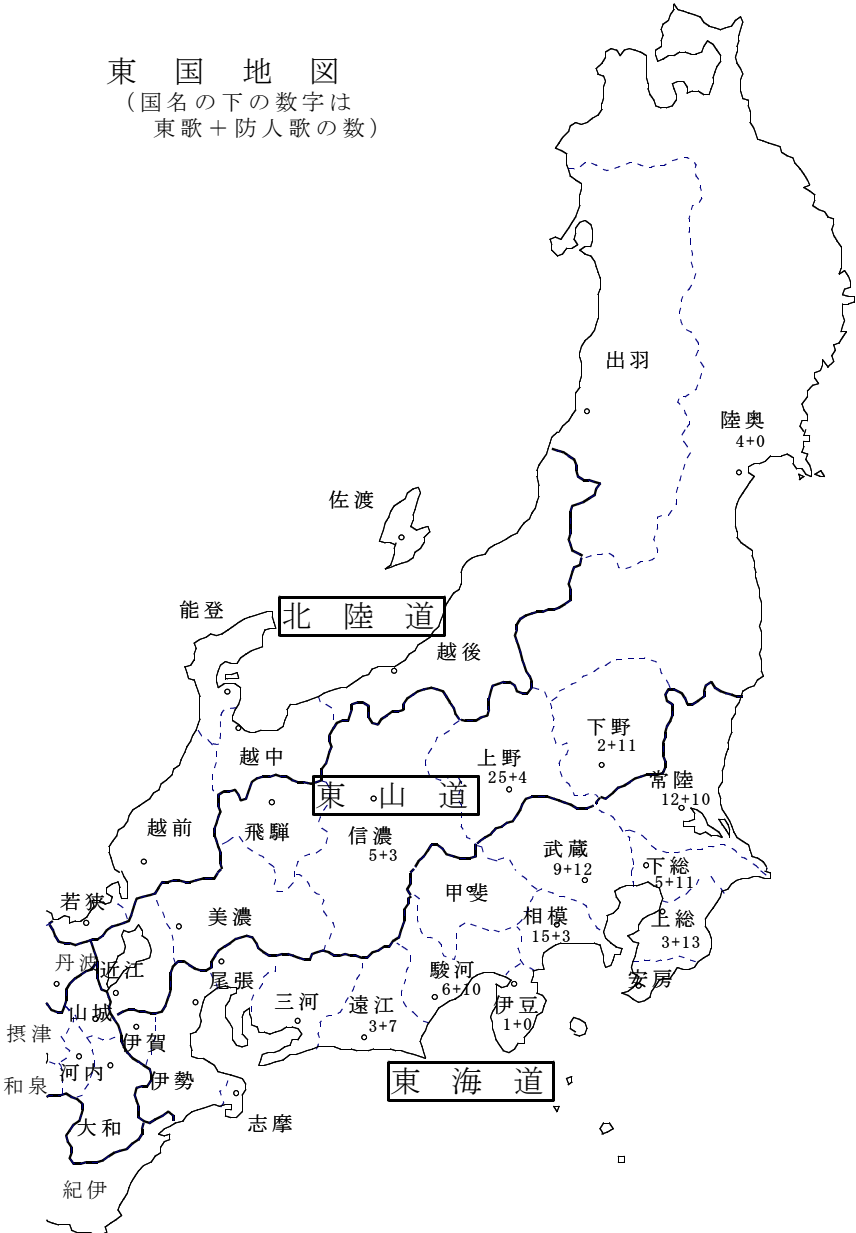
国名判明	雑歌 5	上総 1首 下総 1首 常陸 2首 信濃 1首	東海道 — 東山道
	相聞歌 76	遠江 2首 駿河 5首 伊豆 1首 相模 12首 武蔵 9首 上総 2首 下総 4首 常陸 10首 信濃 4首 上野 22首 下野 2首 陸奥 3首	東海道 東山道
	譬喩歌 90	遠江 1首 駿河 1首 相模 3首 上野 3首 陸奥 1首	東海道 東山道
国名不明	雑歌 140	17首 112首 5首 5首 1首	

合計 230首

東国地図
(国名の下の数値は
東歌+防人歌の数)



※郡界は寛文八年（1668）の上野国郷帳の村名に基づき推定した。



伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ（上野相聞）

伊香保の山に雷よあまり鳴ってくれるな。私にとっては別にどうということはないけれども、あの娘が怖がるものでね。

＊「伊香保」の語源

- ・現在の「伊香保」は渋川市の町名。旧伊香保町。
- ・万葉集の時代の「伊香保」は榛名山のこと。
- ・「いかほ」という語の構成は「いか（厳）＋ほ（穂・秀）」と考えられる。
- ・「ほ（穂・秀）」は、突き出ているもの、他からぬきんでているもの。例えば、稲穂、槍の穂、波の穂などの「穂」。「炎（ほのほ）」は「火の穂」の意。ろうそくの炎の形は槍の穂とよく似ている。山の名には「高千穂」「穂高」など「ほ」の付くものがある。「いかほ」の「ほ」も同じと考えてよい。
- ・「いか（厳）」は「内部の力が充実していて、その力が外形に角張って見えている状態」（『古典古語辞典』の「いかづち【雷】」の項）を表す語で、「いかし（厳し）」「いかめし（厳めし）」「いかる（怒る）」「いかづち（雷）」などの「いか」も同じ。
- ・「いかほ」の「いか（厳）」は、この山のもつどのような性格を「いか（厳）」ととらえたのであろうか。

- ・山の姿
- ・雷の巣窟
- ・火山

伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり（上野相聞）

冬の伊香保風だって、吹く日も吹かない日もあるというけれど、私があなたを思う恋心ばかりは、止むときがないことだ。

＊参考

- 「韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし」（三六七〇）
- 「荒津の海潮干潮満ち時はあれどいづれの時か我が恋ひざらむ」（三八九一）

上毛野伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり（上野相聞）

上野国の伊香保の山に雪が降り積もっている時のように、たやすく行き過ぎることができない、あなたの家のあたりよ。

＊参考

- 「わが屋戸の君松の木に降る雪の行きには行かじ待ちにし待たむ」（一〇四一）
- 日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ（上野相聞）
- 碓氷の山をあなたが越える日は、あなたも袖をはっきりとお振りになった。

ひな曇り碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘れぬかも（上野防人歌）

右の一首は、他田部子磐前のなり。

碓氷の坂を越えるとき、彼女のことを恋しく思われて、忘れるなんてとてもできないことだなあ。

難波道を行きて来までと吾妹子が着けし紐が緒絶えにけるかも（上野防人歌）

右の一首は、助丁上毛野牛甘のなり。

難波への道を無事に行って帰ってきてくださいと言って妻が縫い付けてくれた紐がついにすり切れてしまったことだなあ。

吾が恋は現在もかなし草枕多胡の入野の将来もかなしも（上野相聞）

私の恋は今も切ない。そして（多胡の入野の奥ではないが）将来も切ないことだ。

＊参考

- 「……三郡の内三百戸を郡と成し、羊に給ひて、多胡郡と成す。……」
- 「伊香保ろの岨の榛原ねもころに将来をなかねそ現在し良かば」（三四一〇）（多胡碑 七一年）

昭和三十年まで存在した入野村は、明治二十二年の町村合併の折、小串・黒熊・深沢・石神・中島・小暮・馬庭・岩井・多比良の九ヶ村が合併して成立。村名は、東歌の「多胡の入野」が黒熊附近に比定されるという説を採用して命名された。

3411 多胡の嶺に寄綱延へて寄すれどもあにくやしづしその顔よきに（上野相聞）

多胡の峰に引き綱を掛けて引き寄せるように、頑張つて言い寄つてみたけれど、ああ、憎らしいよ、水底に沈んでびくともしない石のようなやつめ。（ちつとも靡かないでさ。）いくら顔が美しいからって。

3420 上毛野佐野の舟橋取り放し親は離くれど吾は離るがへ（上野相聞）

上野国の佐野の舟橋をばらばらにしてしまうように、親は二人を引き離すけれど、私はあなたと離れたりするものか。

＊参考

「……佐野の三家と定め賜ひし健守命……」（山上碑 六八一年）

「上野国群馬郡下賛郷高田里の三家の子孫……」（金井沢碑 七二六年）

「橋は あさむづの橋。長柄の橋。……佐野の舟橋。……」（枕草子六四）

×「駒とめて袖うち払ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮」（新古今集六七）

×「苦しくも降り来る雨か三輪の崎佐野の渡りに家もあらなくに」（万葉集二六五）

「所は同じ名の、所は同じ名の、佐野のわたりの夕暮れに、袖うち払ひて、お通りあるか篠掛の。」（謡曲舟橋）

「駒留めて、袖うち払ふ蔭もなし、佐野のわたりの雪の夕暮れ、かやうに詠みしは大和路や、三輪が崎なる佐野のわたり。これは東路の、佐野のわたりの雪の暮れに、迷ひ疲れ給はんより、見苦しく候へど、ひと夜は泊まり給へや。」

（謡曲鉢木）

上毛野佐野田の苗のむら苗に事は定めつ今はいかにせも（上野相聞）

上野国の佐野のたんぼの苗を使った占いで結婚を決めた。今さらどうにかできようか。（できはしない。）

3405 上毛野平度の多杼里が川路にも子らは逢はなも一人のみして（上野相聞）

上野国の平度の多杼里の川へ行く道で、あの娘が逢ってくれたらなあ。一人だけで。

3405 或本 上毛野小野の多杼里が安波治にも夫なは逢はなも見る人なしに

上野国の小野の多杼里の安波治でも、あなたが逢ってくれたらなあ。誰にも見られないで。

3414 伊香保の八尺の井手に立つ虹の頭ろまでもさ寝をさ寝てば（上野相聞）

伊香保の高い井堰の上に現れる虹がはつきりと見えるように、そのようにはつきりと二人の仲が明らかになってしまうほど一緒に寝ていられたらなあ。

3494 子持山若鶏冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何どか思ふ（未勘国相聞）

子持山の若いカエデの葉が秋になって色づくまで、あなたと共寝をしたいと私は思う。あなたは どう思う？

3413 利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす会へる君かも（上野相聞）

利根川の浅瀬がどこなのかも考えずに、やみくもに渡って波を受けてしまったように、ばったりと出会ったあなただこと。

3540 左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ（未勘国相聞）

左和多里の乙女に出逢ったけれど、私が乗る赤毛の馬の歩みが速いので、言葉を交わさないまま来てしまった。

上毛野伊奈良の沼の大藺草外に見しよは今こそ益れ（上野相聞）
上野国の伊奈良の沼に生えている（まだ刈り取る前の）大藺草と同じように、あなただけの事を傍らから見ていただけの頃よりも、恋人同士になった今の方が恋心は増しているものを。

